



三重県立
朝明高校

協同学習

協同学習により 生徒の対話力と 役割を果たす力を育む

◎「時を守り、場を清め、礼を正す」を教育指針として、学業・個性・品性の調和のとれた社会人の育成を目指す。普通科に進学・ビジネス・自然環境・アスリートの各コースを設置。ラグビーは花園に出場、レスリングはアジア大会に出場、自転車競技は世界大会に出場などの実績がある。

設立	1978(昭和53)年
形態	全日制/普通科・ふくし科/共学
生徒数	1学年約240人
13年度入試合格実績(現浪計)	私立大は、拓殖大、帝京大、愛知工科大、東海学園大、名古屋外国語大、名古屋学芸大、名古屋商科大、日本福祉大、鈴鹿国際大、四日市大などに延べ23人が合格。他に、短期大9人、専門学校50人、就職128人。
住所	〒512-1304 三重県四日市市中野町2216
電話	059-339-0212
Web Site	http://www.mie-c.ed.jp/hasake/

変革のステップ

背景

◎社会で求められるコミュニケーション力や仲間の中で役割を果たす力、学びへの参加意識の低さに課題があった

STEP 1

実践

◎グループでそれぞれの生徒が役割を担い、対話をしたり、問題を発見して課題を実現したりする協同学習を導入、実践

STEP 2

成果

◎生徒同士の対話が活発になり授業への取り組みが主体的に。コミュニケーション力、仲間への貢献意識、自己肯定感も高まる

STEP 3

自己肯定感を高めて
自分の学びとして取り組んでほしい

三重県立朝明高校が、校内の集団づくり、進路意識の醸成を目的とした改革に着手したのは2004年のことだ。自尊心の低い生徒に居場所をつくるための教育コーチングの導入、早期離職を防ぐための進路意識の醸成や就職内定後の支援のための取り組みは、本誌08年10月号で紹介した。

一連の改革で、退学者数や卒業生の離職率が低下するなどの成果が出た後は、進路指導から授業改善へと学校改革の軸足を移していく。次に焦点を当てたのは、協同学習を軸とした授業づくりだった。竹内均校長は次のように話す。

「『時を守り、場を清め、礼を正す』という指針は生徒に浸透してきていると思います。素朴で素直な生徒たちですが、自己肯定感の低さは依然として課題でした」

進路指導部主事で商業科担当の井波利彰先生も、次のように続ける。

「これからの社会で貢献していくためには、仲間とコミュニケーションを取りながら、自分の役割、責任を果たせる力が必要です。仲間と共に問題を発見し、課題を実現する経験を通じて、コミュニケーション力を付け、役割を果たせたという自信、自己肯定感を高めさせたいと考えていました」

学びに対する消極的な姿も課題だった。3学年担任で国語科を担当する丸野浩一郎先生は、次のように話す。

「6年前に本校に赴任して最初に感じたのは、授業をなんとかしたいということでした。学びに対して無気力な生徒たちの様子を感じ、自分の勉強として捉えてほしい、学びの楽しさを知って授業に取り組んでほしい、と思ったのです」

これらの課題を改善するための活路として取り組み始めたのが、協同学習だった。



竹内 均 たけうち・ひとし
三重県立朝明高校校長
教職歴33年。同校に赴任して3年目。「明鏡止水の心境にて、生徒を受け入れることから教育は始まる」



井波利彰 いなみ・としあき
三重県立朝明高校
教職歴15年。同校に赴任して6年目。進路指導部主事。「社会に出て自立し、共生することが出来るしなやかな心を持った生徒を育てたい」



丸野浩一郎 まるの・こういちろう
三重県立朝明高校
教職歴21年。同校に赴任して6年目。3学年担任。「愛情を持って生徒に接し、愛情を持って授業を行う」



福井彰子 ふくい・あきこ
三重県立朝明高校
教職歴13年。同校に赴任して5年目。1学年担任。「教師は授業で勝負。私自身が学ぶ姿勢を生徒たちに見せていきたい」

初めての協同学習で 対話を始めた生徒たち

08年、井波先生と丸野先生を含む教師4人が授業改善検討委員会（以下、委員会）を立ち上げ、協同学習の研究を始めた。

井波先生も丸野先生もゼロからのスタートだった。井波先生は、08年9月に行った初めての授業公開の際に、協同学習と「郷土学習」を取り換え、四日市市の歴史に関する資料を用意していたほど無知だったと明かす。急いで授業の構成を変えて臨んだ授業公開で、井波先生はKJ法（*1）を使ったグループ学習を試みた。この時の生徒の反応から、協同学習に対する確かな手ごたえを感じ取ったと、井波先生は話す。

「グループで取り組む課題を出すと、これまでは授業に参加していなかった生徒たちが、『僕はこう思う』『それは違うよ』『それ、いいね』などと対話を始めたのです。それは、人間としてのコミュニケーションであり、このような教科書だけでは教えきれない社会の基礎となる力を、協同学習を通して伝えられるのではないかと感じました」

以来、井波先生は担当教科の商業の授業で、協同学習を取り入れてきた。その手法は、授業の目的に応じて変える。「働く目的を考える」といった大きなテーマの時は、授業全てを協同学習に充てる（P.32コラム参照）。確実に覚え

させたい内容の時、生徒の落ち着きがない時、生徒が眠そうな時などは部分的に、3～5人1組のグループによる協同学習を行う。

委員会は、出来るだけ多くの教師が協同学習を実践できるよう、先進校の視察、校内での勉強会、協同学習に力を入れる近隣校との研究授業などを行い、研究を進めた。しかし、校内の普及は限定的で、実践の広がりには課題があった。

「既に協同学習を実践されている先生は効果を実感されていたので、他の先生方にその良さを感じていただくことが課題でした。協同学習と聞くだけで身構えられる先生もいて、私の授業を見てもらっても、『自分の教科では無理』『出来る先生はやればい』と言われることもありました」（井波先生）

役割を果たす責任感、 仲間と協同する喜びを学ぶ

第2期の改革を始めてから3年。試行錯誤の中、協同学習を普及させるため、委員会は授業とは別の方向からアプローチを試みる。学年全体で行うキャリア教育に、協同学習を取り入れることにしたのだ。11年9月、2年生で協同学習の手法による進路学習「進路実現のために、今、知っておくべきこと」が実施された。手順は次のとおりだ。

各クラス6人1組のグループをつくり、各人

*1 プレーンストーミングで出されたアイデアをグループ化して、論理的に整理して問題解決を導く手法。

がそれぞれ1〜6組の教室に赴き、待機している教師や外部の大学関係者などに話をしていた
だき、インタビューを行う。社会人として必要
なこと、進路実現のためにすべきことなどを聞
き取り、自分のグループに戻って、メモを見な
がらインタビューの内容をメンバーに口頭で伝
える。各人はそれぞれの話をワークシートに記
録し、インタビューの感想や自分の役割が果た
せたかどうかを振り返りシートに記入する。

同じグループのメンバーは、自分が聞いた話
を直接聞いていない。自分が聞き漏らしたらメ
ンバーに伝えることが出来ないため、生徒は真
剣に話を聞いてメモを取る。インタビューから
進路実現のために必要なことを学ぶと共に、グ
ループの中で役割を果たすことの責任感と喜
び、仲間と協力する大切さなどを学ぶ。

失敗してもよい 生徒を信じ、任せる姿勢が大切

実施に際し、2学年団は委員会と勉強会を行
い、協同学習やキャリア教育について理解を深
めてから本番を迎えた。学年が団結して協同学
習に取り組むことが出来たのは、社会で求めら
れるコミュニケーション力を生徒に身に付けさ
せたいという思いがあったからだ。当時2学年
担任だった福井彰子先生は次のように述べる。

「本校の生徒は、受け身で指示待ち傾向が

協同学習・井波先生の実践例

「今日の授業では対話が大切です。嫌な言葉を掛けたら相手は嫌な気分になるよね。気持ちよく活動が出来るように、しっかり友だちとコミュニケーションを取りましょう」と言うと、井波先生は持っていたボールを生徒に投げた。受け取った生徒は先生に投げ返す。先生はまた別の生徒にボールを投げる。キャッチボールを通して対話の大切さを体感させるのだ。

テーマは「『働く』とはどういうことなのかを考える」。井波先生が受け持つビジネスコースの3年生で、商業の課題研究の授業として行われた。進め方は学年全体で行うキャリア教育と同じ。養護教諭や学校教育技術員、図書館司書など、教室で待機する教職員のところに行き、働く意義ややりがい、苦勞について話を聞き、グループで共有して感想をまとめる。

「一生懸命働いて学校がきれいになったり、生徒がごみの分別をしてくれたりするとうれしいですし、やりがいを感じます」（学校教育技術員）、「生徒の元気がなかなか回復しない時はつらいです。担任の先生方と話し合っ、最善策を考えるようにしています」（養護教諭）

メモ帳を片手に質問を投げ掛ける生徒たち。真摯に答える教職員の姿から、働く意味や対話の楽しさ、難しさを学んでいく。一通り終わると生徒は教室に戻り、順番に報告する。メモを見ながら、グループのメンバーに自分が聞いてきたことを伝える。「きちんと報告できれば生徒には自信になります。自分が責任を果たさなければ、活動が成り立たないことも学べます。また、教えることで深い学びを引き起こします。教師が言葉で伝えるよりも、はるかに大きい気づきが協同学習にはあります」と井波先生は語る。



教師からの信頼を基に自力で行動し、グループの活動に貢献できたという達成感や自己肯定感、仲間と共に問題を発見し、課題を実現することの面白さの実感が、生徒を主体的な学びに向かわせる推進力となる。

「やりがいは生徒の元気な顔を見ること」と語る養護教諭。生徒は一生懸命にメモを取る

強く、コミュニケーションも苦手です。就職希望者が多いので、コミュニケーション力を付けさせたいという思いは、どの先生も持っていました。私も他の先生も、協同学習の経験はなく、学年でも初めての試みだったので、生徒が指示通りに動けるのか、きちんとメモを取り、グループのメンバーに伝えられるのか不安でしたが、生徒は私たちの期待以上に役割を果たしていました。この生徒には無理

だと決めつけてしまうと、その時点で生徒のチャンスをつぶしてしまうのだと実感しました。失敗してもよいという気持ちで、生徒を信じ、任せることが大切なのだと感じました。いつもは教師の話を集中して聞けないことがある生徒たちが、その日は自分で決められた教室に行つてインタビューを行った。つたないながらもメモを取り、一生懸命メンバーに報告する姿があちこちで見られた。「必死にメモを取

*2 ベネッセの小論文・表現学習教材。書いて伝えることを通して、生きた表現力を総合的に育成することを目指している。

っている」「あの生徒があんなことを言っている」。普段の授業では見ることのなかった生徒たちの姿に、教師たちは驚きの目を向けていた。

協同的な学びの中で 生徒が輝く瞬間がある

この取り組みには20人以上の教師がかかわっており、協同学習の効果を実感し、教科の授業に取り入れる教師が増えていった。キャリア教育における協同学習は、ノウハウが確立したこともあり、学校全体の取り組みとして定着した。学年全体で実践する教科もある。丸野先生は、12年度、2年生の「国語表現」の授業で4人1組での協同学習を始めた。ベネッセの『表現トレーニング』（*2）を使い、発想力や論理的思考力など表現力の基礎を身に付ける授業である。実施当初は、生徒間の対話を促すだけでも一苦労だったという。

「最初はグループをつくるだけで5分、10分掛かり、課題を与えても、話し合いの出来るグループはわずかでした。私がグループを1つずつ回り、黙っている生徒に発言を促すなど、一人ひとりが話しやすい状況をつくる

ところから始めました」
粘り強い指導の結果、生徒の対話も次第に活発になっていき、年度末のアンケートでは一斉授業より協同学習の方が面白いと回答する生徒

が多くなった。この結果を受け、13年度1学年からは全クラスの「国語総合」の授業で協同学習を取り入れることになった。

「生徒の多くは、中学校で協同学習を経験しています。2年生から実施するよりも、入学当初から協同学習を始めた方が、生徒もその方法に慣れ、他教科でも取り入れやすくなると思います」（丸野先生）

今後の課題は、更に多くの教師が協同学習に取り組み、学校全体の動きにしていくことだ。竹内校長は次のように抱負を述べる。

「生徒指導をキャリア教育の一環と位置づけたこともあって、生徒の授業態度はここ数年で格段に落ち着き、教師間の風通しも良く

なつてきました。しかし、まだまだ個々の先生方の力に頼っている部分があり、学校の組織力を向上させていく必要を感じています。先生方一人ひとりが主体的に動ける職場づくりを心掛けたいです」

「協同学習では、『へえ〜!』と言って、生徒の顔が輝く瞬間が必ずあります。日頃から生徒との信頼関係を大切にし、対話の大切さを伝えておく必要がありますが、教師がしっかりと準備して授業に臨めば生徒は変わることを、まだ協同学習を実践していない先生方に知っていただきたいです。それがここ数年、協同学習に取り組み、その効果を実感してきた私の役割だと思えます」（井波先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

教師自身ももっと勉強し 生徒の世界を広げたい

1 学年担任 福井彰子

現在、授業改善検討委員会のまとめ役を務めています。委員会の活動では、取り組みが思うように進まないこともあり、自分のふがいなさを感じることも少なくありません。担任としての仕事が忙しいということ言い訳にして後回しにせず、主体的に取り組まなければ何も進まないと感じています。

本校には、思いがあってもなかなか言葉に出せない生徒、教師の話听不懂な生徒もいます。そうした生徒には、コミュニケーションを取りやすい協同学習は効果的です。担当している英語の授業でも、生徒同士のかかわりを増やして、自分も参加したいという気持ちを持たせることが大切だと考えています。まだ授業のほんの一部で取り入れることしか出来ませんが、生徒同士で感想を言わせる、知っている単語を教え合わせるなど、小さいことから積み重ねていこうと思います。

毎時間の授業での生徒とのかかわりを大切にしていきたいと、私は思っています。生徒にやる気がない、能力が低いといって諦めるのではなく、そういう生徒たちを前に向かせるのが教師の仕事だと思うのです。私自身が向上心を持っていないと、生徒は付いてこないでしょう。教師が楽しく授業を出来なければ、生徒も面白く感じないはず。私自身が英語について、世界のことにしてもっと勉強し、英語の楽しさ、勉強する素晴らしさを伝えていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年12月号指導変革の軌跡「岡山県立邑久(小)高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報誌(高校向け)